

研究主題 「自分の考えを広げたり深めたりする児童の育成

—『読むこと』における思考の焦点化と可視化した交流の指導を通して—

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
江戸川区立平井西小学校 主任教諭 小川 陽介

第1 研究のねらい

平成20年告示の小学校学習指導要領国語編では、思考力・判断力・表現力等の育成のために、相互に思考を広げたり深めたりしながら解決していく能力の育成を重視し、新たに「交流」の指導事項が明記されている。東京都教育委員会は、平成24・25・26年度児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書の中で、授業改善のための視点として、「お互いに意見を出し合ったり、学び合ったりする」といった言語活動を充実させて、自ら課題を追究したり、追究したことを発表したりするなど、思考力等を育む授業へと改善を図ることが大切だと示している。

一方で、本研究で実施した都内公立小学校第5、6学年児童への質問紙調査及び聞き取り調査からは、交流のときに相互に思考を広げたり深めたりしながら課題を解決している児童が少ないという実態が明らかになった。そのため課題を解決するために、自分と異なる考えに出合わせる交流は有効であり、多くの授業に取り入れられている。しかし、思考が揺さぶられ、自問し、自分の考えを広げたり深めたりするには、更に教師の手だてが必要である。

以上のことから、教師が児童の論理的な思考を焦点化し、児童が自分の考えを可視化した交流を行うことで、児童は自分の考えを広げたり深めたりしながら自分の考えをまとめることができる考えた。そこで本研究では、児童が相互に自分の考えを広げたり深めたりすることができる交流の指導の手だてを明らかにすることをねらいとした。

第2 研究仮説

「読むこと」における交流を行う際に、思考を焦点化し可視化することで、児童は自分の考えを広げたり深めたりしながら、自分の考えをまとめることができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 自分の考えを広げる・深める・まとめることの定義

小学校学習指導要領解説国語編「C読むこと」の「自分の考えの形成及び交流」から、自分の考えを広げたり深めたりする指導事項を確認した。考えが広がるとは、文章を読むことによって、ものの見方や考え方が広がることであり、新たな考えやその理由を獲得することである。考えが深まるとは、書き手の思考に即して読んでいくことによって自分の思考も論理的になり、これまでの自分の考えと比べ、考えに対する理由が深まることである。考えをまとめるとは、広げたり深めたりした考えをさらに自問しながら精選して、自分の考えを表現することである。

(2) 思考を焦点化することの定義

国立教育政策研究所から出された平成25年「社会の変化に対応する資質能力を育成する教育課程編成の基本原則」(報告書)の考え方に基づき、具体的な学習場面において児童がどのように情報や思考を構造的に整理するかを確認した。その結果、一つの学習課題では一つの思考に焦点化した方が、児童は学習に取り組みやすいことや、考えの広がりや深まりを焦点化することで、児童は相互に話しやすくなることが分かった。

(3) 思考を可視化することの定義

「交流」に関する先行研究では、発問や話型の研究事例が多かった。そのため、交流の際に児童は、相互の考えや理由を含めた文章や、文章の全体像が短い言葉やキーワードで見える必要性を感じた。よって、可視化した交流をすることが有効であることが分かった。

2 調査研究

国語科「読むこと」における交流に関する意識や実態を明らかにするために、都内公立小学校の第5学年及び第6学年の児童798名と教員93名を対象に質問紙調査を実施した。

(1) 交流への意欲と「読むこと」のつながり

児童は学び合うことが好きで、学び合うことは「読むこと」に有効だと考えている児童が多い(図1)。この結果から、「読むこと」の学習に交流を取り入れることは、児童の学習意欲を喚起できると考えた。

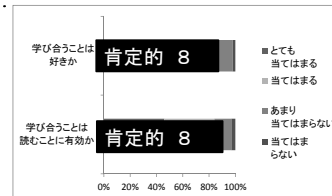


図1 学び合うことに関する児童の意識調査

(2) 交流したときの児童の実態

児童は交流の際に、相互に考えを伝え合った後、「質問や感想が少ない」、「考えがまとまらない」、「どう話し合うか分からない」ことに否定的な児童がいることが分かった(図2)。

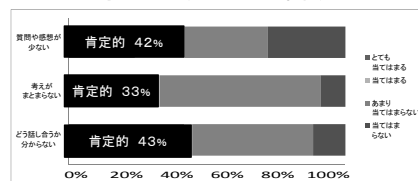


図2 児童が交流で困っていること

上記の否定的な児童に聞き取り(第6学年20名)を行った。交流に困難を感じている児童は、話し合う際「相手の話を理解すること」、「相互に質問や感想すること」に関して、特に難しさを感じていることが分かった。また、「考えをまとめる時間が必要なこと」、「個人で考えなくても交流の機会があれば、答えを得られること」、「いつも決まった人が話し合いをリードすること」が明らかになった。それらの児童は、自分の考えが広がり深まったりしている意識が低いことが分かった。それは交流が考えを伝える行為のみとなり、相互に考えを伝え合った後、質問や感想が少ないためであると考えられる。児童は交流する際に、どのように自分の考えをまとめるか困難を感じている。そこで、児童が個人で考える時間と発言する機会を確保し、相互に考えを広げたり深めたりする交流の仕方を理解して学び合い、「自問」しながら自分の考えをまとめることで、学習の充実感を味わうことができると考える。

3 開発研究

(1) 論理的な思考の焦点化を図る交流の手だての工夫

ア 論理的な思考力を系統的に指導する

児童が文章を読んで、自分の考えを広げたり深めたりするために、国立教育政策研究所から出された平成25年「社会の変化に対応する資質能力を育成する教育課程編成の基本原則」(報告書)を基に、「論理的な思考力」を「比べる」、「関連付ける」、「整理する」、「評価する」の四つに焦点化した。こうすることで、単元や一単位時間において、身に付けさせたい力を明確にした(表1)。

表1 四つの論理的な思考力

	比べる	関連付ける	整理する	評価する
高学年	多面的	規則性 因果関係	抽象化・ 一般化	提案
中学年	分類	変化 理由と根拠	要約 構造化	判断
低学年	比較	順序・理由		疑問

イ 思考を焦点化する交流の手だて

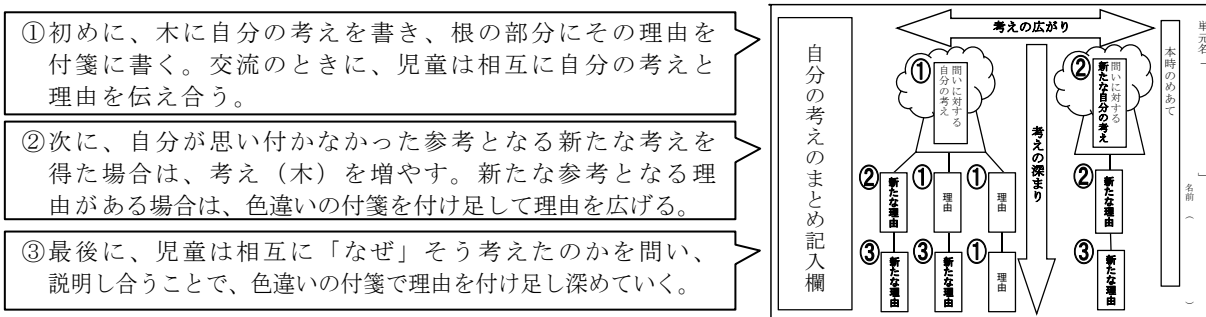
児童は一つの学習課題では一つの思考に焦点化した方が学習に取り組みやすいため、交流の際には初めに考えを「広げる」、次に考えを「深める」のように、思考を焦点化した交流を行う。

(2) 論理的な思考の可視化を図る交流の手だての工夫

ア 「ウッディーチャート」を開発した理由

児童は交流のときに、常に相互の考えや理由を含めた文章や文章の全体像が短い言葉やキーワードで示されると相互の考えを理解しやすい。そのために、論理的な思考を可視化する「ウッディーチャート」の開発をした。「ウッディーチャート」とは、考えの広がりや深まりの両方を可視化した思考ツールである。思考ツールの中には、目的が同じ「ウェビング」や「クラゲチャート」がある。ウッディーチャートは、ウェビングよりも広げる・深めることを横と縦に分けているので、広げるのか深めるのかを児童が判断しやすい。また、クラゲチャートよりも思考（木）を高めるために、理由の根を広げたり深めたりするという思考を高めるイメージがもちやすい。児童はウッディーチャートを活用して、交流の際に相互に考えの共通点や相違点を比べ合い、新たな考えや理由を獲得することで、考えの広がりや深まりの変容を視覚的に実感しながら、自分の考えをまとめることができると考えた。

イ 思考を可視化する「ウッディーチャート」の活用手順



4 検証授業

図3 ウッディーチャート活用方法

都内公立小学校第6学年2学級51名を対象に、「心の成長について考え、学級で随筆集を作ろう」（全10時間）の授業を実施した。学習材は、小学校国語科第6学年下「ぼくの世界、君の世界」（教育出版）を選定した。前項の開発研究に対する読んだことを基にした、児童の思考の変容と意識の変容を検証した。

(1) 論理的な思考の焦点化や思考の可視化を活用した単元作り

本単元では思考の可視化をするために、「ウッディーチャート」を活用した。

表2 検証授業の概要

学習過程	時	ねらい	論理的な思考の焦点化	思考の可視化
投げかけ	〇次	〇	・自分自身を個人で振り返る	比べる
課題把握 見通す	一次	1～3	・教材文と自分の生活体験との共通点や相違点を見付ける	比べる・まとめる 関連付ける・評価する
まとめる	二次	4～8	・文章構成と筆者の要旨を捉える ・教材文から自分の考えをもつ	比べる・まとめる 関連付ける・評価する
広げる 深める	三次	9・10	・児童が相互に自分の考えを広げたり深めたりすることができる	比べる・まとめる 関連付ける・評価する

(2) 論理的な思考の焦点化や思考の可視化

表3 考えの広がりや深まりの付箋の枚数の差(枚)

ア 論理的な思考を焦点化した交流後の児童の変容

児童は交流を通して、自力解決のときとは違う色の付箋を書き足していた(表3)。児童は視覚的に自分の

	交流前	交流後	前後の差
広がり	3	6.5	+3.5
深まり	2.2	3.9	+1.7

考えの広がりや深まりの変容を付箋の量で視覚的に実感することができていた。

